

内容

- ◆館長あいさつ／博物館閉館記念特別展
- ◆博物館新館移転事業の状況報告
- ◆博物館新館展示工事の状況報告

館長あいさつ「沖縄県立博物館新館について」

首里にある現博物館は2006年4月1日に閉館し、2007年11月に那覇の新都心おもろまちに新館が開館する予定です。新館建設を契機に建物を一新するだけでなく、時代に即応し沖縄の県立博物館にふさわしい内容にするべく検討が行われてきました。

常設展のメイン・テーマを「海と島に生きる - 豊かさ・美しさ・平和を求めて」にすることに加え、次の3つのコンセプト(1)沖縄の自然、歴史、文化の発信 (2)琉球王朝文化の体系化と人類学研究の拠点 (3)観て、触れて、愛される、動く博物館が提示されています。新館では、この個性豊かな沖縄の自然・歴史・文化に関する資料を収集・保管し、総合的な調査研究を推進し、その成果を展示等とおして内外に発信します。また、沖縄は地質的条件にも恵まれ、港川人をはじめ更新世の人類、古生物資料が多数発見されています。この自然分野の特性を活かし人類学研究の地方拠点を目指します。そのために新館では、自然史、歴史、考古、民俗、美術工芸に“人類学”を新たに設置し総合博物館としての内容を拡充します。



沖縄県立博物館
2006年12月撮影

さらに、体験学習の場として、観て、触れることのできる展示空間を増やします。ふれあい体験室は子どもたちにとって、自由に遊びながら学べる空間となるはず。生涯学習機能をさらに高めるものとしては、図書、映像資料による情報提供、相談機能のある情報センターを設置します。教育普及事業においても文化講座など館内での事業に加え、移動博物館、学校等における出前授業などの館外事業を増やし、活動的な、動く博物館を目指します。

博物館は、私たちの過去を知るだけでなく現在をよりよく理解し、未来を考える場所です。観る者に知の感動を与え、何度でも足を運びたいような県民に親しまれる新博物館を職員とともにつくっていききたいと思います。

沖縄県立博物館長 名嘉 政修

閉館記念特別展「柳宗悦の民藝と巨匠たち展 - 柳宗悦の心と眼 -」のご案内

沖縄県立博物館では、閉館記念特別展「柳宗悦の民藝と巨匠たち展 - 柳宗悦の心と眼 -」を開催します。沖縄の美術工芸資料を多く所蔵する当館が、首里の地で閉幕を飾るのにふさわしい特別展です。

民藝運動の指導者であった柳宗悦は、彼の思想に共感した河井寛次郎、浜田庄司、芹沢銈介、棟方志功などの協力を得て運動を展開していきました。そうした中、柳は1939年に沖縄へ渡り、多くの工芸品の調査や収集を行いました。また、多岐にわたる活動の中で、沖縄に対し「沖縄こそ真の意味で富めるところであり、すぐれた地方文化をもつところである。沖縄県民は沖縄独自の文化に誇りを持つべきである」と述べています。この言葉は沖縄の人々を勇気づけ、戦後の伝統工芸の復興において作り手たちに影響をあたえました。

この展覧会では、朝鮮・日本・沖縄において柳が収集した作品、及び民藝運動に参加した作家や影響を受けた沖縄の作家たちの作品を紹介します。民藝運動の意味とその魅力を再考していただければ幸いです。



- ◆会期：2006年2月14日(火)～3月12日(日) ◆会場：沖縄県立博物館
- ◆休館日：毎月曜 ◆開館時間：午前9時～午後5時(午後4時30分まで入館可)
- ◆入場料金：一般500(400)円、高校・大学生250(200)円、小・中学生50(40)円
※()内は20名以上の団体料金。
- ◆主催：沖縄県立博物館・琉球新報社・読売新聞西部本社・美術館連絡協議会
- ◆企画協力：E.M.Iネットワーク ◆監修：(財)日本民藝館 ◆協賛：花王株式会社

- ◆関連イベント - 特別文化講座 -
3月4日(土)午後2～4時、当館講堂にて
「柳宗悦の仕事と根本思想」
講師：尾久彰三氏(日本民藝館学芸員)

博物館新館移転事業の状況を紹介します！

沖縄県立博物館には、普段、皆さまが展示室で目にする展示資料のほかにも、多くの貴重な資料が収蔵されており、その数は2005年3月現在で82,776件にのぼります。しかし、この数量はあくまでも登録されている資料の数で、その他学芸員が研究のために収蔵している学芸資料、寄託資料、教育普及関係資料、図書資料等を併せると、総数は14万件を越え、その数は今後も増え続けると考えています。これらの博物館資料の多くは、県内外の皆さまからの寄贈により受け入れられており、その他収集、購入、移管等により受け入れ、様々な展示会や調査研究に活用されています。

当館では、2007年に博物館新館が開館するにあたり2005年から3年計画で、これらの全資料を適切に移転し、さらに博物館新館において活用していくため、「博物館新館移転及び開館準備事業」として収蔵資料の整理作業を行っています。当館は総合博物館として自然史、考古、歴史、民俗、美術工芸の6分野があり、資料の取り扱いは分野ごとに異なります。そのため各分野

において専門知識を有する賃金職員を雇用し、学芸員の指導のもとで資料整理作業を進めています。

2005年度は、移転作業に先立ち、資料の数量や大きさを計測して全体量を把握するとともに、円滑・適切に梱包作業が進むよう、資料の現状・状態を細かく記録する作業を行っています。この作業により作成されたデータをもとに、それぞれの資料に適した状態で、2006年度には梱包が行われ、2007年度に新館へ移転後、収蔵・公開されることとなります。

収蔵資料は、当館が創設された1946年から蓄積されてきたもので、全てが本県の自然・歴史・文化を継承する貴重な文化財です。創設から60年という歳月が経つこともあり、かつての学芸員らが収集した資料の中からは貴重な資料が発見されることもあり、時に私たち学芸員を驚かせることもあります。これらの資料も含め博物館の収蔵資料は、今後県民の皆様に様々な形で広く公開し、後世に受け継いでいけるよう大切に保管されていきます。



▲考古資料の整理作業状況



▲民俗資料の整理作業状況



▲自然史資料の整理作業状況

自然史分野（博物館新館展示工事の状況）

生物では、琉球列島の生物相がどのようにしてできたのかということを中心に、湿潤亜熱帯で生活する生き物の姿をジオラマ・模型・映像・情報検索等により紹介します。

大きな展示スペースをしめるジオラマでは、沖縄島北部・宮古島・西表島低地に本来あるべき植生をベースに、生態系における役割を念頭に置き、動物や菌類(キノコ)などを配置します。何度も野外調査を実施し、展示に取りあげられる種や配置などを検討してきましたが、最も苦勞するのは目立たない分解者です。西表島のジオラマではタイワンシロアリが地中で栽培する菌園から伸びて、梅雨の一時期のみ地表に姿を現すオオシロアリタケの複製を展示します。このキノコは西表島での調査4日目にしてようやく見つけることができましたが、キノコ(菌類)とシロアリの共生という現象を伝える役割も担っています。

自然史部門の映像は、ほとんどが当館のオリジナルです。沖縄島北部の森の分解者として重要なヤンバルオオフトミズは夜間のみ地表に体の一部を出し地面に散らばっている落ち葉を集めます。撮影では、この種が光に敏感なため、雨の降る森のなかを何日も赤外線カメラで姿を探して撮影しました。また、ヤンバルの河川源流域では、季節や場所を変えていろいろなカエルが繁殖に訪れ、それをねらってヒメハブが集まります。昼とはちがった夜の賑わいをお伝えできるよう、今年も夜のヤンバルに学芸員は足を運ぶことになりそうです。

展示資料収集・調査は、天候など、予測できないことによる失敗に終わることもあります。皆さまにできるだけ面白くいろいろな事を語ってくれるモノをお見せできるよう、これからも頻りにフィールドに出かけたいと思います。

港川人骨の展示(化石)

1970年、具志頭村(現八重瀬町)の石切場にて大山盛保氏(故人)が化石人骨を発見。その後、東京大学において研究・保管されていた港川人骨4体のうち2体が新館の開館を機に当館と共同管理となります。この港川人骨を複製し、組み立てる作業を進めています。当館を代表する収蔵資料のひとつであることから、入館して最初の展示スペースに同時代の化石と共に展示する予定です。監修は日本を代表する人類学者である国立科学博物館人類学研究部部長の馬場悠男教授です。現在そのポーズについて検討が進め

られています。どのような展示になるかご期待下さい。



▲骨格模型を前にポーズを検討(左端が馬場教授)

考古分野（博物館新館展示工事の状況）

私たちのくらす沖縄では、今から約6,500年前から土器を使用する縄文文化が営まれるようになります。その後、貝塚時代後期、グスク時代へと移行し、現在の私たちの生活へと受け継がれていきます。このような文化の形成は、島国である沖縄において、他の地域の影響なくしては難しいといえるでしょう。そこで考古展示の一部では「交流」というテーマに基づいた展示が展開されます。古くは数千年前にさかのぼる交流の証しを構成するため、沖縄に持ち込まれた土器や石器等のほか、沖縄から全国各地へ運ばれていった貝製品等を展示し、当時の交流の広がりを再現しようと試みます。

これらの資料の多くは県内外で大切に保管されており、実物資料を永久に借用して展示することはできません。

そこで、複製品（レプリカ）を製作することになります。複製品の製作作業工程には、大きく分けて事前調査・調整から借用、型取り、検査、返却があり、その都度、所蔵先に出張して対応する必要があります。学芸員は、このような作業のほかにも、ぼう大な展示資料の構成や配置、解説原稿執筆、映像・模型製作等について調整を行い、新館の開館へ向けて作業を進めているところです。

複製品の製作風景▶
(北海道伊達市にて)



歴史分野（博物館新館展示工事の状況）



▲荷札（左から表・裏面）

沖縄の歴史を共に歩みたいと思いつつ作業を進めています。

●歴史部門展示では「モノから読む沖縄の歴史」を展示の大

歴史分野では、総合や部門展示資料を練りながら、沖縄の歴史における展示をさらに充実させるため、当館に収蔵されている資料だけでなく、県内外に残されている沖縄に関わる様々な資料を調査しています。新館では収蔵資料とともに、それらを複製品や写真展示により紹介します。来館の皆さまに、より多くの資料

をご覧になっていただき、

きなテーマとしています。新館の開館当初は、那覇港をキーワードとし、琉球を行き交っていた船や交易品、那覇港や首里を描いた屏風絵、船や漂流・漂着をめぐる人々の実態などを紹介いたします。複製で展示する資料のなかで、現在の鹿児島県鹿児島市に所在する浜町遺跡より出土した木製の荷札があります。墨書で、表面に琉球から運ばれる主要な交易品であったヤママモの量と出荷地、裏面にそれを確認した日付と担当役人の名前が記されています。これには上下一つづつ穴が開けられているので、おそらく琉球から交易品を梱包した荷物に付けられたと思われます。1609年における薩摩の侵入後、密接であった琉球-薩摩の関係を浮かび上がらせる貴重な資料です。

これまで多くの人々が残してきた様々なモノ。これらは過去の事を振り返るだけでなく、私たちに未来を語りかけてくれることでしょうか。そういう展示を目指しております。

教育普及事業（博物館新館展示工事の状況）

博物館新館における教育普及事業の目玉の一つに「ふれあい体験室」があります。県民一人一人の多種多様なニーズに応えるとともに「遊びながら学ぶ」をキーワードにしながら「交流とふれあい」を目指した体験空間です。体験アイテムは常設展示と準ずる内容として、各分野の学芸員の多数の案を採用しています。2004年度と2005年度は、子どもたちの興味関心と常設展示との関連に基づいて、体験キットを40アイテムに絞り込みました。また、「ふれあい体験室」と同形態の施設を運営する、東京都、千葉県、大阪府、滋賀県、京都府等の博物館や体験施設を訪問し、体験キットと子どもたちの興味関心、体験キットの安全性や仕組み、体験室の運営等を調査しました。特に、滋賀県立

琵琶湖博物館や大阪歴史博物館の体験エリアにおける近隣地域や学校との交流活動は、生涯学習社会における博物館の使命について考えさせられ、新しい博物館の姿を発見することができました。

これからの新しい博物館は、地域文化の発展に貢献するとともに、地域社会における生涯学習の拠点となり、地域おこしや学校教育を支援する博物館でなければならないと考えます。博物館と地域社会、博物館と学校との結びつきが強く求められる今、モノを提供し合う「資源交流」だけの「連携」に満足せず、モノ（資料・資源）もヒト（学芸員）も相互に交流し、交流によって生まれた学習成果が互いに共有できるような「融和」と「協働」の体系づくりを目指します。

民俗分野（博物館新館展示工事の状況）

民俗分野では、「観る、聴く、覗く、触る、探す」といった要素を重視した体験型の展示が中心となります。展示物への興味・関心を促すために、各展示コーナーには、情報検索を行うPC端末やセンサー付きの音響装置、箱形の覗きケース等を設置しています。また、展示内に再現した古民家の前庭には可動式の小舞台を設けて、職人の方々に「匠の技」を実演してもらう予定です。

新館では、館内に設置されたPC端末を通して、大量の情報が簡単に検索できるようになります。その中には、文字情報だけでなく、画像やビデオ映像などのビジュアル情報も含まれます。

民俗展示室でも「各地の御嶽」「祭り・行事」「人の一生」「ウミのワザ」「衣食住」「諸職のワザ」のテーマを設け、PC端末を設置する予定です。昨年、民俗分野ではPC端末で使用するデータを収集するため、奄美・沖縄の島々を訪ね歩き、調査や撮影を行いました。とりわけ、祭り・行事については、8～12月に祭事が集中するため日程調整に苦労しながらの調査となりました。

今年度、調査や撮影を行った祭り・行事は次のとおりです。

- (1)トカラ列島の盆行事（悪石島の来訪神ボゼ）
- (2)奄美大島のショチョガマ・平瀬マンカイ
- (3)国頭村安田のシヌグ
- (4)国頭村比地のウンジャミ
- (5)那覇の大綱挽
- (6)伊江島の村踊
- (7)多良間島の八月踊
- (8)石垣島の盆行事（アンガマ）
- (9)竹富島の種子取祭
- (10)小浜島の結願祭
- (11)西表島の節祭
- (12)与那国島のマチリ。



▲祭りの取材風景

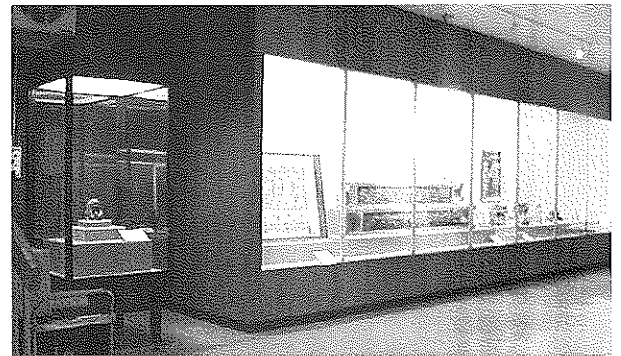
上記以外にも、旧正月や十六日祭、清明祭などの家庭・門中行事の調査を予定しています。音響資料の「国頭村のオタカベ（神女の唱え事）」や「糸満女性のカムアチネー（魚行商）の掛け声」については、現地の住民の皆さまに協力していただき収録する予定です。これらの映像・音響資料は、沖縄の伝統的な生活文化を記録した貴重な資料となります。新館では、多くの県民の皆さまに活用していただきたいと思います。

美術工芸分野（博物館新館展示工事の状況）

美術工芸の分野では、新館に向けて以下の四つの取り組みを中心に進めています。1つ目は、テーマ展示の試みです。これまでの美術工芸の常設展では、書跡・絵画・漆器・染織・陶器の中での種類や技術を紹介する展示が中心でした。そこで、今年度は新館における展示替えを想定して「花」や「憧れ」といったテーマを設定し、美術工芸資料だけでなく、歴史や民俗などの分野にかかわる資料も積極的に展示の中に取り入れてきました。これにより、来館者の皆様へ「琉球の美」の新鮮な見方を提供できるのではないかと考えています。新館の常設展では、年間4回～5回の展示替えを計画し、来館された方が美術工芸展示室で毎回違う資料を見ることができる、という展示を目標としています。

次に、新館の総合展示の中で使われる予定の複製品の製作にも取り組んでいます。琉球の絵師の作品や、屏風、歴史資料など、特に美術工芸に関連の深い資料を中心に製作しています。これまで、滋賀大学にある「琉球貿易図屏風」や大和文華館の山口宗季（呉師虔）「花鳥図」等の複製を行いました。

さらに、新館に向けて設立された「博物館新館資料収集基金」を使つての資料の購入です。これまで当館に収蔵され



◀「動物」をテーマにした展示風景

ていなかった、琉球王国の工芸の草創発展期を代表する漆器等の資料を、収集していく取り組みを進めています。

最後に、これまで収蔵されているものの保存状態に問題があり、展示することの難しかった資料の修理修復です。今回は、住友財団の基金を活用する形で、旧円覚寺の仏像群（県指定文化財）の資料を新館における展示を想定して、京都の美術院という工房が修理修復を進めています。現在は白象と獅子の像の修理を行っています。

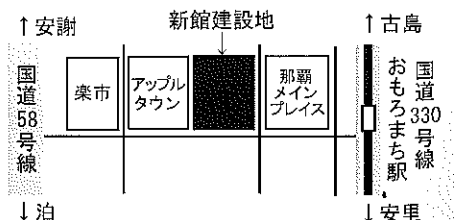
新館に移転した後も美術工芸分野の展示内容の中心は、実物資料です。資料から伝わってくる琉球美術工芸の色・形、その力強さをご観覧ください。

沖縄県立博物館
OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

(写真：当館正門の看板-2005年12月首里大中町在-)

首里所在の博物館は、2006年4月1日をもって一時閉館し、移転いたします。新館の建設地は右のとおりです。

これまでご愛顧賜りまして、当館職員一同、深く御礼申し上げます。新館においても宜しく願いいたします。



新館建設地：那覇市おもろまち3丁目1番地